

＜狐と狸＞ゴズイの若い実が7月の中ごろには子狐に見えました (No.12)。この実が赤く色づきぱっくりと割れ、つやのある黒い種をぶら下げた赤狐の顔に変身しています。実の姿からキツネノチャブクロという別名が付いたのでしょうか。しかしこの名は若いのと熟した実のどちらからイメージされたのでしょうか。若い実そのものが茶袋にも見え、熟した実は黒い茶袋を持った狐の顔にも思えます。



＜キツネノチャブクロの若い実＞

ところで“キツネノチャブクロ”はコミカンソウやムラサキケマンそしてホコリタケというキノコの別名でもあります。これらの草花やキノコの姿かたちから同じ名前がどうして付いたのかとんと想像が付きません。“狐と茶袋”の組み合わせはよほどに印象深かったようですね。



＜キツネノチャブクロの熟した実＞

こんなことを考えているうちにいささか脱線して、狐といえば狸、この2種の動物に対して私たちの持つイメージはどうかとか、キツネやタヌキの名の付く植物はどれ位あるのかと気になり出しました。ざっと調べるとどちらも5つ6つはあります。そのうちでも“キツネノチャブクロ”と同じく想像力をかきたてるのが“キツネノエフデ”と“タヌキノシヨクダイ”でしょうか。

＜キツネノエフデ＞先が紅く尖り下部は白の筆状のキノコ。＜タヌキノシヨクダイ＞写真でしか見ていないが、白い子狸が踊っているようにも見える4cmほどの腐生植物、天然記念物、実に不思議な姿をしている。



＜クサギの実＞

＜魔法の手ーその2＞キツネノチャブクロにも劣らぬ色鮮やかさでクサギが実を付けています。“はねつき”の羽根のようでもあり紅い衣を纏った妖精が群舞しているようでもあります。これもまた花 (No.14) から想像もつきません。ただ、青い種を包み込んだ実の姿と蕾は色こそ違えどどちらも角ばった袋状で似ています。こんなことまで魔法の手は差配したのかかもしれません。

＜命を繋ぐ季節＞は秋が一番、まさに寒さの冬を迎える前の稔りの季節です。ビオトープの流れが注ぐ辺りで大きく育ったアキグミにとってもその季節で、赤くて丸い実を沢山付けています。幾つか食べてみました。渋みのある甘酸っぱい味がして野辺で遊んだころを思い出します。虫たちにとっても



＜ミヤマアカネ＞



＜アキグミの実＞

近づくと寒さの前の頑張り時で、昼下がりの日当たりにはトンボやチョウの姿がまだ見られます。

(文と写真： 松本正勝)